

認知症カフェ 設立～運営の事例報告



地域事業課 小林正道

報告概要

認知症カフェである「Dスマイルカフェ」の設立から運営までの事例を報告する。

Dスマイルカフェは認知症に対する偏見や誤解をなくし、認知症をジブンゴトとして捉え、「認知症があっても明るく元気に暮らせるまち」を地域全体で考える風土をつくる事を目的として開催されている。

背景

認知症カフェの機能

- ◆ピアカウンセリング
- ◆相談機能
- ◆当事者にとって安心できる居場所
- ◆当事者にとって役割を発揮できる場所
- ◆専門職同士のコミュニケーションの場所
- ◆普段、認知症と関わりが少ない方も一緒に集い、認知症の人と時間を共有する場所
- ◆認知症について情報を得る場所
- ◆認知症の事を自分事として考える場所

機能の分化

◆居場所型

認知症の人や家族にとって居心地の良い
時間と空間

◆地域型

地域の人に対する認知症の理解促進、啓発

運営組織

- ①NPOくわのみ
- ②特別養護老人ホーム（社会福祉法人）
- ③グループホーム（株式会社）
- ④居宅介護支援事業所（一般社団法人）
- ⑤認知症サポーター
- ⑥介護家族
- ⑦大学看護学生



運営組織

複数の事業者や住民と共同で運営する理由

- ・できるだけ多くの人に参加してもらう為、地域の専門職からの繋がりが有効
- ・カフェの運営で生じる様々なニーズや相談に対応する為、多くの専門職が必要。

※ただし、業務都合による欠席も多く、
出席できるスタッフは毎回5～8名ほど

運営の目的

認知症に対する偏見や誤解をなくし、
認知症をジブンゴトとして捉え、
認知症があっても明るく元気に暮らせる
地域をつくること

具体的には・・・

- ①多くの住民に認知症のことを正しく知ってもらう学びの場
- ②認知症を隠さずオープンに語り合う場
- ③認知症について専門職などに気軽に相談できる場

これらの目的の為、あえて認知症カフェである事を前面に出し、「認知症」というキーワードを多用するよう意識している。

ちなみに

くわのみカフェでは・・・

認知症という言葉は積極的には使わず、認知症の人も自然に、認知症である事を意識せずに楽しく過ごせるコミュニティカフェとして運営

運 営

- ・ 2017年4月 開設
- ・ 毎月開催 曜日は不定期
- ・ 14時 ～ 15時30分
- ・ 参加費 100円
- ・ 申し込み不要
- ・ メニュー コーヒー、紅茶、緑茶

※お代わりは謳ってないが、コーヒー
が余った場合は注ぎ足したりしている。

- ・ 茶菓子は地域の菓子店などで、80円～90円
程度のものを参加者が選べるようにしている。



会 場

岩村コミュニティセンター

- ・ 岩村地域のほぼ中心に位置
- ・ 適度な広さ
- ・ トイレが使いやすい
- ・ 駐車場が広い
- ・ 場所代 1時間 900円 (3時間 2700円)
→ 恵那市の助成で1350円

運営費

- ・ 参加費
- ・ 朝日新聞厚生文化事業団
『ともにつくる認知症カフェ開設応援成』

プログラム

司会者挨拶

- ①このカフェが認知症カフェであること
- ②認知症について学ぶことができ、
オープンに語り合える場であること
- ③困りごとの相談ができること

プログラム

☆カフェタイム

参加者同士の交流時間

☆イベントタイム

催しの時間

☆ワークタイム

認知症について一緒に考える時間

参加者の動向

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	延べ 数	月平 均
参加者総数	42	62	16	12	38	10	17	197	28
地域住民	26	13	13	11	13	10	11	97	14
認知症当事者 (デイサービス等利用中に 職員と参加した人は除く)	2	1	1	1	0	0	1	6	1
医療福祉関係者	3	17	0	1	23	0	5	49	7

参加者の動向

その他の参加者

地域企業、行政、警察官、民生委員、
実習生など

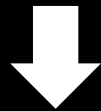
新規参加者

- ・6月以降 計5名
- ・そのうち4名は友人に誘われて参加

ワークタイム

4月 趣味を大切に

認知症になっても趣味を続けようというメッセージを発信しつつ、趣味が同じ人たちとおしゃべり。



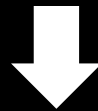
- ・ 旅行のテーブルで話していた認知症の男性
「白骨温泉に行きたい。子供の頃に行って楽しかった思い出がある。このカフェで新しい知り合いができれば、一緒に行きたい。」

認知症になっても夢を語り、
実現することができる

ワークタイム

6月 認知症シンポジウム

警察、病院、銀行、地域包括など関係機関が座談会形式で認知症をテーマに、それぞれの取り組みや課題を話し合う。



- ・ 地域住民

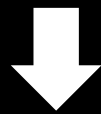
「自分が認知症になった時の生活について、色々考えることができた。」

自分と認知症と地域を
重ね合わせて先のことをイメージ

ワークタイム

7月 医師と対談

認知症をテーマに地域で
訪問診療を行う医師と対談。



参加者から、「もの忘れと認知症の境目は？」
などの多くの質問があり、積極的に学ぶ様子が見られた。



認知症になってもできることはたくさんあるし、地域のサポート体制があれば、楽しい人生を送ることも可能であると、大勢の人に知ってほしい。

そういう体制を整えていくことが大切で、このようなカフェを継続的に行うことで意識が少しずつ変わっていく。

ワークタイム

8月 認知症当事者による講演と漫才

名古屋市在住の若年認知症の当事者による講演と漫才。当事者としての思いや生活の中で工夫してる事などを聞く。



・参加した地域住民の声

「本人の話が聞けてとっても良かった。参考になった。」

「自分はまだ認知症ではないけど、あんな風に明るく
いられるんなら、なんだか希望が見えてきた。」

「認知症になってしまったら、不安だけだと思ってた
けど、そうじゃないと思った。」

当事者の前向きな生き方に触れて
認知症のイメージが変わった

その他の取り組み紹介

カフェを楽しくする為の工夫

- ・ 手作りケーキ
- ・ 脳活性ゲーム
- ・ 音楽演奏
- ・ 選べるお菓子



課題

- ・ 地域住民の参加が少ない
 - 口コミによる地道な努力
- ・ 認知症を考えるためのワークの準備が大変
 - ワークの頻度を3ヶ月に1回にする
など検討

まとめ

認知症カフェ開催の目的を①認知症について学ぶ、②認知症を隠さずオープンに語り合う、③認知症について専門職などに気軽に相談できる、という3点に絞ったことでプログラムづくりの方向性が明確になった。

また、参加者にとっても「認知症になっても明るく笑顔で暮らせる町」について自分たちで考えるというメッセージがより強く伝わっていると感じている。